

## 第2回 動物の顔のついた縄文土器（獣面把手～じゅうめんとして～）

縄文時代には、土器や石器といった実用的な道具だけでなく、土偶など非実用の道具もたくさん作られます。その中には、フチの部分に動物の装飾が付けられた縄文土器があります。こうした土器装飾のことを、考古学では**獣面把手\***と呼んでいます。

今回ご紹介する獣面把手は、常名に所在する弁才天遺跡で発掘されたものです。破片なので土器全体の形はわかりませんが、恐らくバケツのような形（深鉢形土器）であったと思われます。「顔」は土器の内側を向いて作られており、突き出した鼻が作られ、口元はまるで微笑んでいるかのようにカーブしています。目と鼻は棒状工具を突き刺して表現されています。後頭部から背中には粘土紐が張り付けられており、タテガミのようです。背中部分に見られるその他の装飾から、縄文時代前期の後半に流行した**諸磯<sup>もろいそ</sup>c式**（約5700年前）という**土器型式\*\***であることが分かります。実は、土器型式でいうとひとつ前の時代、**諸磯b式土器**（約6000年前）には、イノシシをモチーフとした獣面把手が付けられることが知られています。一方で、弁才天遺跡出土例のような、**諸磯c式**の獣面把手は珍しいといえます。前時代の伝統や、タテガミの表現からイノシシとも考えられますが、柔らかい表情はクマのようにも見えますね。皆さんは何だと思いませんか？

この土器は7月22日から開催のテーマ展「フィギュアの考古学」で展示されます。是非会いに来てください。



顔を正面から見たところ



背中からみたところ（写真上が顔）

※ここでいう把手とは、実際につかむ部分ではなく、縄文土器のフチにつけられた装飾という意味です。

\*\*土器型式とは、一定の時期と地域に特徴的な土器のまとまりのことです。文様や土器の厚さなどの特徴で、他の型式と区別することができます。土器型式がわかると、その土器がいつ、どの地域で作られたのか、おおよそ知ることができます。